© Kaupo Kikkas

クラシック音楽界の新しい景色を切り拓く21世紀に求められる理想のマエストロ

今月のマエストロ

パーヴォ・ヤルヴィ

Paavo Järvi

文◎広瀬大介 | Daisuke Hirose

楽員のパフォーマンスを最大限に高める抜群のリズム感を活かした明晰な指示

2019年9月20日、NHK交響楽団の9月定期公演Cプログラム1日目。グスタフ・マーラー《交響曲第5番》が終わった後、NHKホールは、近年類を見ない大歓声に包まれた。あらゆるレパートリーの中でもっとも得意とするマーラーをもって、パーヴォ・ヤルヴィは首席指揮者として堂々たる名演を繰り広げた。

パーヴォの指揮姿は、身振りこそ大きいものの、大袈裟（おおげさ）という印象を与えることはない。抜群のリズム感を活かしてきちんと拍節を示し、オーケストラの楽員にはこれ以上ないと言えるほどに明晰（めいせき）な指示を出し続ける。この指揮者の真骨頂は、リハーサルにおいて音楽を作り込んだ後に、本番においてみずからは交通整理役に徹することで、楽員のパフォーマンスを最大限に高めることを目的としている点にある。その意味では、あらゆる楽器が独奏として活躍する場の多い《第5番》はこの指揮者とオーケストラにとっては、うってつけの作品であっただろう。

同様に、9月Aプログラムのルトスワフスキ《管弦楽のための協奏曲》でも、複雑なリズムをたたみかけるようにして盛り上がっていく作品を得意とするパーヴォの真価が発揮された。エストニア出身の指揮者として、北欧作品の紹介も、継続して積極的に取り組んでいる。同じく9月のBプログラムで披露された、これまでの

定期公演でも取り上げられてきたトゥールやニルセンの楽曲は、きっと日本の聴衆にとってもより身近な存在となったはずである。シベリウスでは《交響曲第6番》《第7番》を、間を空けずに演奏し、この作曲家が見つめていた北欧の景色とマエストロ自身の内面を浮き彫りにしてみせた。

ヨーロッパ・ツアーに先駆けて贈る ブルックナーとラフマニノフの代表作

世界一流のオーケストラとの共演は引きも切らない。2019年10月、スイスのチューリヒ・トーンハレ管弦楽団の音楽監督兼首席指揮者としての活動を開始した一方で、11月にはオランダのロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団との来日公演も果たした。若手を育てることを主眼とした、毎夏開催される故郷エストニアでの音楽祭も順調な発展を続けている。オーケストラの楽員に君臨するのではなく、ともに音楽を作ろうとするパーヴォの姿勢こそ、21世紀に求められる理想の指揮者像なのだろう。

今回の公演では、ヨーロッパ・ツアーに先駆けて、現地でも披露するブルックナーとラフマニノフの代表作に挑む。抜群のセンスで独奏者に合わせることのできる、協奏曲の名手パーヴォのバトン・テクニックも愉しめるだろう。本稿執筆時には、2022年8月までの首席指揮者契約延長のニュースも飛び込んできた。パーヴォは先頭に立って、N響とともに、誰もまだ見たことのない、クラシック音楽界の新しい景色を果敢に切り拓こうとしている。

［ひろせ だいすけ／音楽学者］

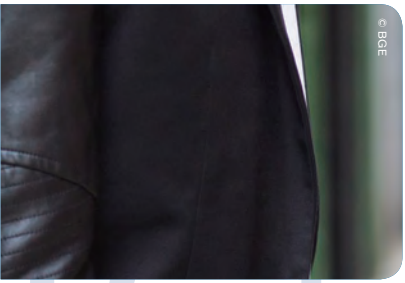
プロフィール

2019年9月にNHK交響楽団首席指揮者として5シーズン目を迎えたパーヴォ・ヤルヴィは、これまで重点的に採り上げてきたドイツ・ロマン派や北欧、ロシアの作品に加えて、オール・ポーランド・プログラムなど意欲的な曲目にも取り組んでいる。その挑戦する姿勢は、発信力の強さと相まって、N響のみならず、日本のオーケストラ界全体にとって大きな刺激となっている。N響とは、録音の分野での成果も目覚ましく、2016年度には「レコード・アカデミー賞」を受賞した。また『武満徹管弦楽曲集』など新譜のリリースも続いている。一方、海外活動にも積極的で、2020年2月から3月にはN響と2度目となるヨーロッパ公演を行い、ロンドン、パリ、ウィーン、ベルリンなど7か国9都市を回る。

エストニアのタリン生まれ。現地で打楽器と指揮を学んだ後、アメリカのカーティス音楽院で研鑽を積み、バーンスタインにも師事。シンシナティ交響楽団音楽監督、hr交響楽団首席指揮者、パリ管弦楽団音楽監督などを歴任。現在は、ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団芸術監督、自身が創設したエストニア祝祭管弦楽団芸術監督などを務める。2019/20年シーズンからはチューリヒ・トーンハレ管弦楽団の音楽監督兼首席指揮者に就任。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団などの名門オーケストラにも客演し、現代を代表する指揮者のひとりとして、世界で活躍している。

Paavo Järvi

パーヴォ・ヤルヴィが指揮するプログラム詳細はこちら
PROGRAM A ▶ P. 7
PROGRAM B ▶ P. 10



© BGE

生き生きとした音楽が魅力の次代の巨匠が大胆不敵なプログラムを携え定期初登場

今月のマエストロ

ラファエル・パヤーレ

Rafael Payare

文◎伊藤制子 | Seiko Ito

マゼールに認められた才能

N響定期公演では世界的な指揮者やソリストによる名演に接する機会も多いが、若く勢いのある次代の巨匠に出会うのも心躍る体験だ。Cプログラムにはまさにそんなフレッシュな指揮者、1980年生まれのラファエル・パヤーレが初めて定期公演に登場する。彼の名をいちやく広めたのは、名匠ロリン・マゼールにその傑出した才能を認められ、2015年のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団定期に彼の代役として抜擢（ばってき）されたことではないだろうか。この時の成功により、パヤーレは活躍の場を広げ、その上昇気流に乗った指揮振りが注目を集めている。

オペラ指揮者としても活躍中の新鋭が「勝負曲」として掲げるロシア音楽

現在のパヤーレは着々とレパートリーを拡充している途上であり、オペラ指揮者としてスウェーデン王立歌劇場で《蝶々夫人》も振っているが、彼にとって一種の「勝負曲」の一角にロシア音楽があるように感じる。先のウィーンでの代役デビューの際にも、チャイコフスキーの《交響曲第4番》を指揮しており、2015年4月25日の日本でのデビューになった新日本フィルハーモニー交響楽団の公演では、プロコフィエフの《交響的協奏曲》、チャイコフスキーの《交響曲第5番》という選曲だった。2017年のN響

との初共演でもチャイコフスキーの《交響曲第4番》を取り上げており、ロシア物への意欲を感じさせる。

ロシア音楽とひと口にいっても種々のスタイルがあるわけだが、定期公演初登場となる今回のプログラムはオール・ショスタコーヴィチ。パヤーレのこだわりが見て取れる攻めた選曲だ。N響定期公演の聴衆に対する、彼なりのアピールとみて間違いないだろう。

エネルギッシュな演奏に期待したい オール・ショスタコーヴィチ・プログラム

《バレエ組曲第1番》は架空のバレエのための作品で、映画音楽からの引用なども含み、ショスタコーヴィチならではのエンターテインメント性やリズム造形の巧みさも際立つ。時にシャープな響きが入り交じるものの、すっと耳になじんでくる不思議な感触もある。こういった曲を冒頭に置いてまずは聴衆の心を摑(つか)もうという趣向から、パヤーレなりのこだわりが浮かび上がる。

続く《チェロ協奏曲第2番》では、不穏かつシニカル、時に大胆な和声や硬質でシャープな響きのする音楽をいかに料理するか。妻であるソリストのアリサ・ワイラースタインとは共演を重ねており、どんな音楽に仕上がるのか、楽しみである。

プログラムの締めくくりは《交響曲第5番》である。ショスタコーヴィチ作品の中でも指折りの名曲で、N響ファンはこれまでの名演を記憶しているのではないだろうか。パヤーレはアンサンブルを巧みにつくりあげる手腕に長(た)けているが、彼の魅力はやはり生き生きとした躍動感。エネルギッシュな演奏を期待したいところだ。

［いとう せいこ／音楽評論家］

プロフィール

ベネズエラの音楽教育システム「エル・システマ」は、多くの音楽家を輩出していることで知られている。その象徴的な存在が日本でも人気の指揮者グスターボ・ドゥダメルだが、1980年生まれのラファエル・パヤーレもエル・システマ出身の俊英だ。シモン・ボリバル・ユース・オーケストラをはじめ、地元ベネズエラで多くのオーケストラを指揮すると同時に、クラウディオ・アバド、サイモン・ラトルら著名指揮者のツアーや録音に参加。2014年から2019年まで北アイルランドのアルスター管弦楽団の首席指揮者・音楽監督を務め、2016年と2019年にはBBCプロムスに招かれている。2019/20年シーズンにはサンディエゴ交響楽団の音楽監督に就任。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、シカゴ交響楽団と共演するなど、欧米での活動を着実に広げており、ギル・シャハム、ジャン・イヴ・ティボーデ、ピョートル・アンデルジェフスキら人気ソリストと共演している。N響とは、N響「夏」や地方公演での共演はあるが、定期公演への登場は今回が初めて。［伊藤制子］

afael Payare

ラファエル・パヤーレが指揮するプログラム詳細はこちら PROGRAM C ▶ P. 13

PROGRAM

A

第1935回

NHKホール

2/15 土 6:00pm

2/16 日 3:00pm

指揮 | パーヴォ・ヤルヴィ | 指揮者プロフィールはp.4

ホルン | シュテファン・ドール

コンサートマスター | 篠崎史紀

アブラハムセン
ホルン協奏曲（2019）［NHK交響楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、NTR土曜マチネ、シアトル交響楽団、オークランド・フィルハーモニー管弦楽団共同委嘱／日本初演］［18′］

Ⅰ とてもゆっくりと、穏やかに
Ⅱ 嵐のように、せわしなく
Ⅲ とてもゆっくりと、時間を感じさせずに

――休憩（20分）――

ブルックナー
交響曲 第7番 ホ長調［64′］

Ⅰ アレグロ・モデラート
Ⅱ アダージョ：きわめて荘厳に、そしてきわめてゆっくりと
Ⅲ スケルツォ：きわめて速く―トリオ：ややゆっくりと
Ⅳ 終曲：動きをもって、しかし速すぎず

Artist Profile

シュテファン・ドール（ホルン）

© Simon Pauly

完璧なテクニックと豊潤な音色を持つ、ホルン界のリーダー的存在。1965年ドイツに生まれ、エッセンとケルンで学んだ。わずか19歳でフランクフルト歌劇場の首席奏者に就任。バイロイト祝祭管弦楽団、ニース・フィルハーモニー管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団の首席奏者を経て、1993年からベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席奏者を務めている。

ソリストとしても、バレンボイム、ハイティンク、アバドなどの指揮者と共演。アバドからはルツェルン祝祭管弦楽団の首席奏者としても招かれた。室内楽奏者としては、ベルリン・フィルの団員とのアンサンブルのみならず、ポリーニ、フォークト、ボストリッジなどの著名演奏家と共演し、木管五重奏の最高峰、アンサンブル・ウィーン・ベルリンのメンバーも務めている。

N響とは2013年以来7年ぶりの共演。2008年ヴィリ、2011年細川俊夫、2014年リームが彼のために作曲した新作の世界初演を行うなど、現代音楽の実績も豊富だけに、アブラハムセンの協

奏曲の日本初演にも大きな期待が集まる。

［柴田克彦／音楽評論家］

Program Notes｜安川智子

新作初演が各都市で連続して行われるとき、その反応には都市と聴衆の個性が表れる。アントン・ブルックナー（1824～1896）の《交響曲第7番》は、ライプツィヒでの世界初演（1884年）の後、ミュンヘン公演と、これまでブルックナーに手厳しかったウィーンでも成功が続いたことで、作曲家を真の巨匠ならしめた。この度私たちはハンス・アブラハムセン（1952～）の《ホルン協奏曲》日本初演に立ち会う。1月にベルリンで世界初演を終えたばかりのこの作品は、ここ日本で、どんな初演の物語を生み出すだろうか。

アブラハムセン

ホルン協奏曲（2019）［NHK交響楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、NTR土曜マチネ、シアトル交響楽団、オークランド・フィルハーモニー管弦楽団共同委嘱／日本初演］

デンマーク生まれのアブラハムセンは、ホルン奏者としての訓練を積んだ後、作曲の道へ進み、1970年代には早くもその才能を開花させた。ストラヴィンスキーやブリテンも受賞したレオニー・ソニング音楽賞を2019年に受賞し、今世界中でもっとも新作が待ち望まれている作曲家のひとりである。2013年にベルリン・フィルハーモニー管弦楽団によって初演されたソプラノ独唱と管弦楽のための《レット・ミー・テル・ユー》は、英国人作家ポール・グリフィスの小説を土台とした作品で、大いに話題を呼んだ。この後にもちあがったのが、今回の共同委嘱である。アブラハムセンの音楽の特徴は、御伽噺（おとぎばなし）のような純粋性と幻想性を兼ね備えた独特な詩的世界と、その芳香を空間に解き放つ澄み切った響きである。3つの楽章からなる本曲も、古典的な編成で透明感を保ちつつ、多彩な打楽器がアクセントとなっている。両端に静かで悠然とした楽章を配置することで、ホルンの響きが存分に生かされている。第3楽章は高度なリズム計算によって、逆に超越した時間感覚が得られる。作品は、今回独奏を務めるシュテファン・ドールに献呈されている。

作曲年代	2019年
初演	2020年1月29日、ベルリン、パーヴォ・ヤルヴィ指揮、シュテファン・ドールのホルン独奏、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
楽器編成	フルート3（ピッコロ2、アルト・フルート1）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2（Esクラリネット1）、ファゴット2（コントラファゴット1）、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、シロフォン、グロッケンシュピール、クロタル、ヴィブラフォーン、大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、シズル・シンバル、タムタム、トライアングル、ウッド・ブロック、ハープ1、チェレスタ1、弦楽、ホルン・ソロ

ブルックナー

交響曲 第7番 ホ長調

1886年3月21日にウィーンで演奏されたブルックナーの「新しいホ長調交響曲」について、フランスの音楽新聞『ル・メネストレル』のウィーン通信欄はこう報じている（3月28日号）。「これは巨匠の7番目の交響曲であり、間違いなく彼のもっとも重要な作品だ。ベートーヴェンの最後の合唱付き交響曲以来、ブルックナーの《第7交響曲》に匹敵しうる交響曲は他にないと、ここにいる誰もが同意する」。当のウィーンではハンスリックらが皮肉たっぷりに評していたが、それらをものともしない国際的評価の確立だった。

《交響曲第7番》の成立と成功には、巨匠リヒャルト・ワーグナーの死と、それに対するヨーロッパ中の敬礼の意も影響を与えている。1883年、本作の第1、第3楽章の作曲をすでに終えて、第2楽章アダージョに取り組んでいたブルックナーは、ワーグナーの訃報を聞き、深い哀悼の意を込めて、葬送のコラールを第2楽章の最後部に書き込んだ。ワーグナー自身が《ニーベルングの指環》で導入した「ワーグナー・テューバ」と通常のテューバによる、嬰ハ短調のコラールである。この和声に凝縮された美しい黙禱（もくとう）を、第2楽章のみならず、交響曲全体の核として聴くことで、崇高な響きの建築物の全体像が見えてくる。ライプツィヒ初演の後のミュンヘン初演（1885年3月10日）で、この交響曲を圧倒的な成功に導いたのは、ワーグナー《パルシファル》の初演指揮者、ヘルマン・レーヴィだった。

第1楽章アレグロ・モデラート、ホ長調、2/2拍子。ホルン独奏とチェロによって、ホ長調の主和音（ミ―ソ♯―シ）が上行形の分散和音として奏でられる。この自然な音型から陰のある旋律へと進む主要主題をはじめ、各主題が反転して展開部が始まる。展開部後半では、反転した主要主題が突如全合奏で鳴り、再現部を経て、最後はカリヨン（複数の鐘）のように響きが折り重なる。**第2楽章**アダージョ、嬰ハ短調、4/4拍子。ワーグナー・テューバとヴィオラが奏でる美しい旋律ののち、全音ずつ丁寧に3音上昇するヴァイオリンの動きに、長調の自然な和声がつけられる。この3音上昇の和声の響きがこの後何度も登場し、感動的な展開を導き出す。葬送のコラールは、2度目の主題再現から続くクライマックスの直後に訪れる。**第3楽章**スケルツォ、イ短調、3/4拍子。複付点が特徴的な主題が繰り返される主要部が、間にヘ長調のトリオを挟んで反復される。**第4楽章**終曲、ホ長調、2/2拍子。第1楽章の主要主題と第3楽章に特徴的な複付点のリズム、さらに第2楽章に登場したワーグナー・テューバが用いられ、各要素が統合される。

作曲年代	1881年9月23日～1883年9月5日
初演	1884年12月30日、ライプツィヒ市立劇場、アルトゥール・ニキシュ指揮、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、ワーグナー・テューバ4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、トライアングル、シンバル、弦楽

PROGRAM

B

第1934回
サントリーホール
2/5 水 7:00pm
2/6 木 7:00pm

指揮 | パーヴォ・ヤルヴィ | 指揮者プロフィールはp.4

ヴァイオリン | レティシア・モレノ

コンサートマスター | 篠崎史紀

プロコフィエフ
ヴァイオリン協奏曲 第1番 ニ長調 作品19[23′]
Ⅰ アンダンティーノ
Ⅱ スケルツォ：ヴィヴァチッシモ
Ⅲ モデラート

――休憩（20分）――

ラフマニノフ
交響曲 第2番 ホ短調 作品27[60′]
Ⅰ ラルゴ―アレグロ・モデラート
Ⅱ アレグロ・モルト―モデラート―メノ・モッソ
Ⅲ アダージョ
Ⅳ アレグロ・ヴィヴァーチェ

Artist Profile

レティシア・モレノ（ヴァイオリン）

レティシア・モレノはスペイン出身のヴァイオリニスト。マドリードのソフィア王妃高等音楽院とケルン音楽大学でザハール・ブロンに、ザールラント音楽大学ではマキシム・ヴェンゲーロフに師事した。その後数々の国際的コンクールに入賞。2012年にはドイツの権威のある賞「エコー・ライジング・スター」を受賞し、ヨーロッパ各地で演奏会を行った。これまでに、ズービン・メータ、エサ・ペッカ・サロネン、パーヴォ・ヤルヴィ、ウラディーミル・アシュケナージ、クリストフ・エッシェンバッハ、ペーテル・エトヴェシュなど著名な指揮者と共演を行ってきた。また、ウィーン交響楽団、サンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団、マーラー室内管弦楽団、ワシントン・ナショナル交響楽団、マリインスキー劇場管弦楽団、フィレンツェ五月音楽祭管弦楽団、モンテカルロ・フィルハーモニー管弦楽団など欧米の一流オーケストラと共演したほか、スペインのメジャー・オーケストラに定期的に招かれて

いる。2018/19年シーズンにはロンドンでフィルハーモニア管弦楽団と、北京で国家大劇院管弦楽団との初共演も果たした。使用楽器はニコラ・ガリアーノ（1762年製）である。

［片桐卓也／音楽評論家］

Program Notes｜千葉 潤

帝政ロシア末期、終わりゆく伝統を体現したセルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）と、来たるべき未来を宿したセルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）。指揮者のパーヴォ・ヤルヴィは、この対照的な作曲家の組み合わせがお気に入りだ（2019年2月の定期公演でも、ラフマニノフの協奏曲とプロコフィエフの交響曲を取り上げている）。時代の変化を合わせ鏡のように照らし出す、知的かつ意欲的なプログラムに期待が高まる。

プロコフィエフ

ヴァイオリン協奏曲 第1番 ニ長調 作品19

強烈な不協和音や無機的なオスティナート（同一音型の反復）を駆使してロシア・モダニズムをリードし、「恐るべき神童」と呼ばれた若き日のプロコフィエフ。その彼も、実人生では恋の悩み多きひとりの若者であった。《ヴァイオリン協奏曲第1番》は、彼が初めて叙情的な音楽性を発揮した作品だが、その着想は彼の大恋愛と関連している。お相手はサンクトペテルブルクの裕福な家の娘ニーナ・メシチェルスカヤ。2人は結婚を考えるが、折悪しく第1次世界大戦が勃発（ぼっぱつ）。将来のためにロシア・バレエ団の興行主ディアギレフとの関係を強めたいプロコフィエフは、ニーナを略奪してヨーロッパへの逃避行を計画するが、彼女の両親の妨害によって挫折し、その後、2人の関係は急速に冷めていった。ほろ苦い青春の思い出は、この協奏曲の最初と最後に奏される「夢見るような」独奏ヴァイオリンが優しく伝えている。

第1楽章　アンダンティーノ、ニ長調、6/8拍子。「夢見るように」と指示された第1主題と、プロコフィエフ好みのメカニックな動きが特徴の第2主題によるソナタ形式。

第2楽章　スケルツォ：ヴィヴァチッシモ、ホ短調、4/4拍子。プロコフィエフ自身が「スケルツォの中のスケルツォ」と豪語した楽章。ヴァイオリンの超絶技巧が目まぐるしく駆使される。

第3楽章　モデラート、ト短調、4/4拍子。ラプソディックな主要主題とより律動的な副主題が交互に発展するが、最後は第1楽章主題が再現され、夢幻のなかに消えていく。

作曲年代	1915～1917年
初演	1923年10月18日、M. ダリューの独奏、S. クーセヴィツキー指揮、パリ・オペラ座管弦楽団、パリ
楽器編成	フルート2（ピッコロ1）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、テューバ1、ティンパニ1、小太鼓、タンブリン、ハープ1、弦楽、ヴァイオリン・ソロ

交響曲 第2番 ホ短調 作品27

帝政ロシア末期、ピアニスト・作曲家・指揮者としてマルチに活躍したラフマニノフだが、1905年の「血の日曜日」事件後の騒乱の高まりを受け、指揮の職を辞して作曲に専念すべく、家族と共にドイツ・ドレスデンに新居を構える。円熟期に立つ彼が満を持して書き上げた《交響曲第2番》は、循環主題を駆使した大規模な楽章構成、重厚なクライマックスの構築法、ロシア的な旋律美があいまって、同じくホ短調のチャイコフスキーの《交響曲第5番》と同様、西欧とロシア2つの交響的伝統を見事に融合した名作となった。

第1楽章　ラルゴ、4/4拍子―アレグロ・モデラート、2/2拍子、ホ短調。冒頭、低弦が呟くように提示する主題や、それに応答する陰鬱な和声主題は、全曲を統一する循環主題であり、その狭い音程を往復する動機は、さまざまな主題に浸透している。第1主題がこの動機から直接派生するのに対し、木管の和声で始まる第2主題は、ラフマニノフらしい息の長い歌へと成長する。駆動力のあるリズムにのって第1主題が徹底的に展開された後、再現部では、第2主題が一層雄大に歌い上げられる。

第2楽章　アレグロ・モルト―モデラート―メノ・モッソ、2/2拍子、イ短調。颯爽としたリズムや輝かしい管弦楽法が目覚ましい効果を上げる。他方では、ホルンが提示するスケルツォ主題から、トリオでの弦によるフガートや中間部の金管コラールが派生し、最後には循環主題が回想されるなど、精緻な動機操作にも支えられている。

第3楽章　アダージョ、4/4拍子、イ長調。ラフマニノフの真骨頂といえる甘美な音楽。特筆されるのは、極めて独特で濃密な対位法であり、蔦が絡みつくように、いくつかの副声部がつねに主旋律と共に進み、クライマックスにおいては巨大な1本の旋律に合流する。

第4楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ、2/2拍子、ホ長調。タランテラ（南イタリアの舞曲）を彷彿させる躍動的な第1主題と、他の楽章の副主題に共通する息の長い第2主題によるソナタ形式。提示部の終わりには第3楽章アダージョ、展開部では第2楽章スケルツォが回想され、再現部の最後には循環主題のコラールが金管によって重厚に再現されて全曲を統一する。

作曲年代	1906～1908年、タネーエフに献呈（モスクワ音楽院作曲科の師）
初演	1908年2月8日（旧ロシア暦1月26日）、作曲家自身の指揮、ジロティ演奏会、サンクトペテルブルク
楽器編成	フルート3（ピッコロ1）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン1）、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、小太鼓、グロッケンシュピール、弦楽

PROGRAM

C

第1933回

NHKホール

1/31 金 7:00pm

2/1 土 3:00pm

指揮 | ラファエル・パヤーレ | 指揮者プロフィールはp.6

チェロ | アリサ・ワイラースタイン

コンサートマスター | ライナー・キュッヒル

ショスタコーヴィチ（アトヴミャーン編）
バレエ組曲 第1番［14′］

Ⅰ 叙情的なワルツ
Ⅱ 踊り
Ⅲ ロマンス
Ⅳ ポルカ
Ⅴ ふざけたワルツ
Ⅵ ギャロップ

ショスタコーヴィチ
チェロ協奏曲 第2番 ト長調 作品126
［33′］

Ⅰ ラルゴ
Ⅱ アレグレット
Ⅲ アレグレット

――休憩（20分）――

ショスタコーヴィチ
交響曲 第5番 ニ短調 作品47［45′］

Ⅰ モデラート
Ⅱ アレグレット
Ⅲ ラルゴ
Ⅳ アレグロ・ノン・トロッポ

Artist Profile

アリサ・ワイラースタイン（チェロ）

© Decca / Paul Stuart

1982年生まれ。父はクリーヴランド弦楽四重奏団の第1ヴァイオリン奏者だったドナルド・ワイラースタイン、母はピアニストのヴィヴィアン・ワイラースタイン。4歳でチェロを始める。13歳でクリーヴランド管弦楽団とチャイコフスキーの《ロココ風の主題による変奏曲》を共演した。クリーヴランド音楽院でリチャード・ワイスに師事。コロンビア大学ではロシア史学を修めた。

2010年、ダニエル・バレンボイム&ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とエルガーの《チェロ協奏曲》を共演。2012年にバレンボイム＆ベルリン国立歌劇場管弦楽団とエルガーやエリオット・カーターの《チェロ協奏曲》を、2015年にはパブロ・エラス・カサド＆バイエルン放送交響楽団

とショスタコーヴィチの《チェロ協奏曲第1番》《第2番》の録音を行った。同時代の音楽にも熱心に取り組み、彼女のために書かれたパスカル・デュサパンやマティアス・ピンチャーの新作チェロ協奏曲を世界初演している。NHK交響楽団とは2015年2月に初共演。パーヴォ・ヤルヴィの指揮のもとで、エルガーの《チェロ協奏曲》を弾き、雄弁でスケールの大きな演奏を披露した。

［山田治生／音楽評論家］

Program Notes｜中田朱美

このプログラムでは、潑剌（はつらつ）とした20代から闘病に苛（さいな）まれた後年までのドミートリ・ショスタコーヴィチ（1906〜1975）の作曲家人生を駆け抜ける。映画・演劇・バレエのための付随音楽を50作（作品番号付きのもの）手がけ、他の芸術ジャンルとの交流も盛んであったショスタコーヴィチ。《バレエ組曲》からは、多ジャンルを器用に手がけた多才さ、生涯の作品に連なるユーモアのセンスが鮮やかに伝わってくることだろう。

ショスタコーヴィチ（アトヴミャーン編）

バレエ組曲 第1番

ショスタコーヴィチのバレエ音楽は《黄金時代》（1929〜1930）、《ボルト》（1930〜1931）、《明るい小川》（1934〜1935）の3作で、それぞれの組曲も編まれている。一方、《バレエ組曲》の第1番から第4番は、《明るい小川》を軸に、他の付随音楽の小品も織り交ぜながら編集され、1950年から1953年にかけて毎年ひとつずつ出版された。

これらの編集・編曲は、ショスタコーヴィチの了解を得てレヴォン・アトヴミャーン（1901〜1973）が行った。《バレエ組曲第1番》に所収された全6曲はすべて《明るい小川》からのもの。とはいえ、第1曲〈叙情的なワルツ〉の初出は《ジャズ組曲第1番》（1934）第1曲で、第5曲〈ふざけたワルツ〉の初出は《ボルト》の第28曲である。つまりそう、付随音楽のジャンルでは、ショスタコーヴィチ自身が頻繁に楽曲を再利用していたのである。また《明るい小川》を中心に組曲が多く編まれたのは、このバレエが1936年の公式批判によって上演禁止になっていた状況と無関係ではないだろう。一連の再利用には、かつてのバレエ音楽を響かせ続けようとした作曲家とその理解者たちの想いも感じられる。

以下、原曲であるバレエ《明るい小川》の場面展開をふまえて見ていこう。**第1曲〈叙情的なワルツ〉**は第1・3幕で流れる民衆の群舞のワルツ。**第2曲〈踊り〉**はバレリーナの踊り。**第3曲〈ロマンス〉**はヒロインが旧友と再会するシーンで流れる。**第4曲〈ポルカ〉**は第2幕の間奏曲。**第5曲〈ふざけたワルツ〉**は男性主人公や女装バレエ・ダンサーが踊る愛らしいワルツ。**第6曲〈ギャロップ〉**の《明るい小川》でのタイトルは「ロシアの踊り」。農民たちが陽気に踊る場面で登場する。

作曲年代	［原曲］1930～1935年作曲、［組曲］1949年編集、1950年出版
初演	［組曲版初演］不明
楽器編成	フルート2（ピッコロ1）、オーボエ1、クラリネット2、ファゴット1、ホルン3、トランペット2、トロンボーン2、テューバ1、ティンパニ1、トライアングル、タンブリン、小太鼓、シンバル、グロッケンシュピール、ヴィブラフォーン、シロフォン、ピアノ1（チェレスタ1）、弦楽

ショスタコーヴィチ

チェロ協奏曲 第2番 ト長調 作品126

ショスタコーヴィチの創作活動のうち最後の10年間は、殊に内省的・思索的な作品が多い。さらに「死」のモチーフや自作の懐古的な回想と関わる作品も増えていく。その背景には悪化するポリオや心臓病の闘病生活が大きく影を落としていた。《チェロ協奏曲第2番》を完成させたのもクリミアの保養所であった。

だがこうした中でもショスタコーヴィチはユーモアを忘れていない。第2楽章に登場する旋律は、《ブーブリチキ（リング状のパン）はいかが》という1920年代にオデッサで流行った歌謡曲。この引用については弟子グリークマンへの手紙の中で本人が言及している。これはなんと1966年の新年のパーティをロストロポーヴィチたちと過ごした際、一番好きな曲を披露しあう遊びでショスタコーヴィチがピアノで弾いていたものだった。

またロストロポーヴィチが弟子のウィルソンに語ったところによると、草稿を書き始めてまもなくの頃、演奏者には普段、完成前の作品を見せないショスタコーヴィチが、重音奏法について、平行10度（例えばドと1オクターブ上のミの音程、第1楽章に登場）や3弦を使った4度（例えばドとファの音程）の行き来（第3楽章）が難しくないか聞いてきた。そこでロストロポーヴィチは何も問題なく演奏できますときれいに弾いてみせたのだが、後でひどく後悔した、この箇所にさしかかる度に間違えないか緊張するとこぼしたという。

第1楽章のこの平行10度の箇所の前には独奏チェロのカデンツァがあり、大太鼓との緊迫した掛け合いが展開する。同様に第3楽章のカデンツァでも打楽器（タンブリン、小太鼓）と独奏チェロが対峙（たいじ）する。ちりばめられた超絶技巧の爆発性と鎮静性とを内包した、非常に思惟的な作品である。初演は作曲家の誕生日に開催された60歳記念演奏会で、スヴェトラーノフの指揮のもと、ソビエト国立交響楽団によって行われた。独奏パートを演奏したのはもちろん作品を献呈されたロストロポーヴィチである。

第1楽章（ラルゴ）は、複雑なソナタ形式とも複合3部形式とも捉えられる。独奏チェロの内省的な主題から始まり、徐々にショスタコーヴィチのイニシャルの音列にもとづく主題が軸となる。**第2楽章**（アレグレット）では上述《ブーブリチキはいかが》の旋律が変奏される。切れ目なく**第3楽章**（アレグレット）へ。冒頭のファンファーレとカデンツァを経て、ゆったりと波間を揺らめくバルカロール（舟歌）のような主要主題が登場する。後半では第1楽章の両主題や《ブーブリチキ》も回想される。

作曲年代	1966年3月17日～4月27日
初演	1966年9月25日、作曲家の60歳記念演奏会、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ独奏、エフゲーニ・スヴェトラーノフ指揮、ソビエト国立交響楽団、モスクワ音楽院大ホール
楽器編成	フルート1、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット3（コントラファゴット1）、ホルン2、ティンパニ1、タンブリン、小太鼓、トムトム、ウッド・ブロック、ムチ、シロフォン、大太鼓、ハープ2、弦楽、チェロ・ソロ

ショスタコーヴィチ

交響曲 第5番 ニ短調 作品47

ショスタコーヴィチの《交響曲第5番》（1937）は全15作の交響曲の中で群を抜いた人気を誇る。全4楽章の構成的な均整が美しく、動機労作の彫琢（ちょうたく）も徹底されているため、かつてベートーヴェン的と称揚されたのもうなずける。興味深いのは、本作が結局のところイデオロギー的な立場に関わらず、ソ連国内でも諸外国でも、さらには21世紀の現在に至るまで、ある意味普遍的に人気を博してきた事実である。

作曲家本人はこの作品について、「悲劇的衝突を経て、いかに楽観論が肯定されるか」、あるいは「人格の形成」などと語ったり、撤回したりしていた。一方、21世紀に入ると、当時のロマンスの相手エレーナの夫となったロマン・カルメン映画監督から着想を得て、ビゼー《カルメン》から音型を借用している様子が検証されてきた。とはいえこれらの《カルメン》関連の音型は、本作の前に書かれたが、この時点ではまだ初演できずにいた《交響曲第4番》（1935～1936）や《プーシキンの詩による4つのロマンス》（1936～1937）からの借用音型とも一部一致している。つまりあの峻厳（しゅんげん）たる響きの背後には、どうやら次元の異なるインスピレーションの層が幾重にも堆積していそうなのである。こうした捉え難い側面も、人々の心を捕えて放さない間接的な要因なのかもしれない。

第1楽章（モデラート）は変型したソナタ形式。冒頭の序奏主題をはじめとして、4つの個性的な主題が展開する。**第2楽章**（アレグレット）はスケルツォで、諧謔味（かいぎゃくみ）あふれるエピソードが特徴的。**第3楽章**（ラルゴ）は一転して葬送の雰囲気で、3つの主題と派生したエピソードがモノローグのように流れる。**第4楽章**（アレグロ・ノン・トロッポ）は冒頭の勇壮かつ緊迫した第1主題に始まり、飛翔を感じさせる第2主題を経て、やがてファンファーレ的なコーダへと昇華する。

作曲年代	1937年4月18日～9月20日草稿完成、10月下旬総譜完成の可能性が高い
初演	1937年11月21日、エフゲーニ・ムラヴィンスキー指揮、レニングラード・フィルハーモニー交響楽団
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、Esクラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、タムタム、グロッケンシュピール、シロフォン、ハープ2、ピアノ1（チェレスタ1）、弦楽

N響百年史

第十回 ― N響の〝生みの親〟――山田耕筰伝〈挫折篇〉

片山杜秀 ― Morihide Katayama

二〇二六年のN響創立百周年に向け、NHK-FM「クラシックの迷宮」のパーソナリティとしてもお馴染みの思想史研究者で音楽評論家の片山杜秀さんが、N響の歴史を時代背景とともに、独自の視点からひもときます。今シーズンは職業オーケストラの黎明期から山田耕筰、近衛秀麿の登場、N響の前身である新交響楽団の誕生までを描く予定です。ベルリンから戻り、岩崎小彌太肝いりの東京フィルハーモニー会を率いて前代未聞の大演奏会を成功させた山田耕筰。次なるプロジェクトは――。

定期演奏会の開始

1915（大正4）年5月、東京の都新聞に、「フィルハーモニー会」と題された記事が出た。「今回山田耕筰氏指揮の下に管絃楽を設け毎月一回帝劇に於て演奏会を開く由」。東京フィルハーモニー会管弦楽部のスタートである。メンバーを常雇いにして、なるべく給料だけで食べていけるようにしようという、80人編成の交響楽団である。活動の核は、毎月最後の日曜に、東京の帝国劇場で開かれる予定の定期演奏会だ。日本の西洋クラシック音楽シーンを大きく前に進めようという大事業だった。

もちろん、単にオーケストラというなら、東京音楽学校（現東京藝術大学音楽学部）や宮内省楽部や陸海軍軍楽隊が管弦楽団を編成していた。百貨店の持つ少年音楽隊も、人数はかなり少ないけれど、小管弦楽団だとはいえた。しかし、市民のために劇場やコンサートホールで常時演奏することをなりわいとする職業的な交響楽団となると、まだなかった。民間でオーケストラの出演する演奏会を開こうと思ったら、軍楽隊を雇いきりにするとか、音楽学校の卒業生や軍楽隊のOBなどをかき集めて臨時編成の楽団をいちいち作るとかしていた。

三菱合資会社副社長、つまり三菱財閥の副総帥の岩崎小彌太を中心人物とする東京フィルハーモニー会も同様だった。小彌太は欧米の大都市の市民音楽文化のありように憧れていた。東京も同様にしなければならない。1910（明治43）年に「時代ニ適応スベキ音楽ヲ振興スル」ことを目的に、仲間の財界人たちを結集して、会を立ち上げた。とはいえ、この組織も、自前の演奏団体を持てないできた。年数回のコンサートを、そのたびに出演者を集

め、管弦楽団や合唱団をどこかに頼んでいた。だが、ついに欧米諸都市の市民による多くのフィルハーモニー協会のように、交響楽団を運営する日がやってきたのだ。

きっかけは、小彌太がずっと留学の面倒を見てきた山田耕筰の才能を、1914（大正3）年12月の東京フィルハーモニー会の演奏会で、小彌太がついに確信できたからである。耕筰は臨時編成の交響楽団を見事に振って、自作や泰西名曲を披露した。小彌太はただちに、日本人男性楽団員のみによる常設の大交響楽団を、東京フィルハーモニー会の一組織として作り、音楽監督的地位を耕筰に与えようと決めた。西洋人の指揮者や西洋人のプレイヤーではダメなのである。明治以来の近代日本の文明開化、その真の達成を内外に披露するには、ナショナルなオーケストラでなければ意味がない。日本人は西洋音楽をついに自家薬籠中のものとし、西洋文明の仲間入りを果たし、しかも西洋の単なる物まねでない日本人作曲家によるオリジナリティのある作品も演奏している。その証明のための交響楽団だ。これこそ西洋クラシック音楽における日本の夜明けだ。

冒頭に掲げた都新聞の記事はこう続く。「聴衆の便宜の為に半年及び一年極めの予約会員を募ること」とする。はて、いくらだろうか。半年の会員券の価格が載る。演奏会6回分のようである。特等が7円20銭、一等が4円80銭、二等が3円84銭、三等が2円70銭。一回券はというと、順に1円50銭、1円、80銭、50銭だ。

今日の金銭感覚でいうとどのくらいだろうか。比較はなかなか難しい。だが、たとえば、大正初期の帝国劇場における最もランクの高い興行の最高入場料は4〜5円であった。帝国劇場は日本の富裕層に最高の舞台を提供する劇場として名声を誇っていた。だから、岩崎小彌太も東京フィルハーモニー会管弦楽部の定期演奏会場を、会場費もさぞ高かろう帝国劇場にしなければならなかった。そこに行くのが教養と余裕のある市民のステータス・シンボルだった。今日でいえば外来一流のオペラやオーケストラにS席で行く感覚が4〜5円の幅にあるのだろう。つまり今日は大正初期のおよそ1万倍か。あるいは日雇労働の賃金を考えると、大正初期の相場は60銭くらいという。今日の短期アルバイトの平均日給が約1万円とすれば、15000倍以上だ。明治末年のかけそばの値はどうか。3銭が相場という。今日の立ち食いそば屋のかけそばと比べれば、やはり1万倍ほどだろうか。とりあえず1万倍で計算すると、東京フィルハーモニー会管弦楽部定期演奏会の特等の1回券は15000円、定期会員になれば1回あたり12000円くらいになる。

ワルツ尽くしの真意は？

さて、山田耕筰指揮する東京フィルハーモニー会管弦楽部の第1回の演奏会は、1915（大正4）年5月23日に行われた。曲目は耕筰自作の《序曲ニ長調》の初演の他は、ヨハン・シュトラウスII世作曲の、当時の表記で《美しき青きダニウヴ河に添ひて》《芸術家の生活》《維納気質》、そしてレハールの《気軽な寡婦》と《妖女の舞踏》に、レオ・ファルの《不朽のワルツ》と《離婚の女》。オペレッタの題名になっているところは、そこからワルツを1曲やったということ。ほとんどワルツ尽くしだった。レハールとファルは当時の新しいワルツである。《気軽な寡婦》こと《メリー・ウィドー》が初演されてまだ10年しか経っていなかった。

第1回の記念の演奏会だから、舞踊会風の

華やかな演奏会にする趣向だったのか。ちょっと違う。耕筰は雑誌『音楽世界』の1915年6月号に寄せた演奏会終了の報告文にこう記す。

「何故ワルツのみを出したか夫(それ)にはいろいろの理由がある。第一に部員の技術が平均されていないために初めからシンフォニーとかその他厳正な形式の音楽を演(や)るにはあまりに無謀な事であつたからで」ある。東京で優れたメンバーを集めてシンフォニー・オーケストラを立ち上げてはみたものの、技術の面でも解釈の面でも複雑な要求の多い楽曲をいきなりやらせるのは、大正初期の日本人演奏者の技量の問題としても、無理ということだ。でも、たとえばワルツばかりで目先を変えず、一本道で練習するなら、負担も少なく、とりあえずかたちにしやすい。そこから始めよう。しかし、ワルツばかりにした理由は、オーケストラの腕前の問題ばかりでもないと断りを入れる。

「聴衆に対する教育の方法としても五目飯のような雑多なものを演ずるよりも一晩に一色のものを聞きすます方がいいだろうと思つた」。

かなりの上から目線ではある。だが正鵠(せいこく)を射ているだろう。楽団員の技術だけでなく、聴衆の鑑賞力もまた問題だ。交響詩や交響曲を聴取する力が、教養ある市民にも、一般にはまだない。それが日本の現実だ。でもワルツなら多少の馴染(なじ)みがすでにあるだろう。鑑賞しやすいはずだ。だからワルツ尽くしである。

でも、そこで話は終わらない。耕筰は今まで日本人がワルツだと思って演奏してきたワルツは本当のワルツではないという。ワルツの3拍子とはワルツならではの3拍子でなければならない。そもそも日本人の音楽感覚はリズムに関して著しく一本調子で、伸縮性や柔軟性を欠き、音楽をつまらなくしている。演奏家も聴衆もそういう次元からやり直さなければダメだという。

「ワルツを選んだのは東洋人に一番かけているリズム即ち拍子を深く知らせる事を必要と思つたためである。一晩反覆して三拍子を演ったならば余程ワルツに対する概念が極めて深く人に入りはしないか」。「誰でも一度欧州の空気にふれて来た人はこのワルツにあの華やかなウィーンの夜を思はない人はないだらう」。「私共のオーケストラで今迄(まで)の日本のオーケストラの持たない」音楽をやりたい。日本でこれまで西洋クラシック音楽と信じられてきた日本人の楽士たちによるオーケストラの実演の数々は、「ただ単に音楽を弾」き、「指を巧妙に転ば」していただけだった。「私共のオーケストラ」は「充分な又用意周到な研究をして自分達の好む芸術家の作物の核心を吃(ども)りながらも伝えたい」。「私はこの会が回を重ねるに従つて種々の欠点を補ひ、すべての汚れを掃除して進みたいものと思つてゐる」。

欧州の本物を日本に伝えられる日本人指揮者は自分だけ。自負心が漲(みなぎ)っている。生意気な！ まだ20代のくせに！ 耕筰を嫌う人は多かった。しかし、信奉者も付いた。彼らは耕筰を新時代そのものと思い、熱狂した。耕筰は別に留学先のドイツで指揮をしていたわけではなかったのだが、本物の指揮者をたくさん観て聴いてはきているし、何といっても役者だ。魅力ある指揮がいきなりできた。悪い意味ではなく、人を誑(たぶら)かしてしまえるタレントだった。

専用ホールの夢、そして挫折

そんな耕筰が東京フィルハーモニー会管弦楽部の活動によって志したのは、オーケストラ音楽の魅力を、日本の演奏家と聴衆の最大多数に最短期間で刷り込むことだった。定期会

員券を高いと思わない聴き手をごまんと作る。自分のオーケストラ音楽もたっぷり聴かせる。そのために交響楽団は、最良の環境で長くたっぷり練習し、早くうまくならなくてはいけない。

そこで何が必要か。本番のときだけ帝国劇場を借りているようでは見込みがない。専用ホールを建て、いつも同じ場所で練習し、本番もする。根城を作る。そうするとホールもオーケストラもどんどん生きてくる。耕筰の理想であり、岩崎小彌太の究極の夢でもあった。フィルハーモニー協会は自前のホールを持つべき——滞欧生活の長かった小彌太はよく知っていた。

だが、2人の理想は日本の時代状況から飛びぬけすぎた。今日のこの国の一流オーケストラでさえ、その夢を叶えているところはひとつもない。しかも小彌太の人生の段階もちょうど切り替わるところだった。彼は1906（明治39）年から三菱合資会社の副社長をしていた。三菱財閥総帥になるための見習い期間ということである。見習いはだいたい10年。合資会社の社長に推戴（すいたい）される時期に差し掛かっていた。

そのタイミングで小彌太は、夢の専用ホールの建設を三菱の文化事業とし、80万円の予算を計上しようとした。仮に1万倍の計算で今日の金額に擬せば、80億円である。たとえば1997（平成9）年に落成した札幌コンサートホール（Kitara）の建設工事費は175億7593万円であったと公にされている。小彌太の夢の値段の規模もそのへんから見当がつくだろう。

小彌太への代替わりを円滑に進めたい三菱の長老たちはどう反応したろうか。素晴らしい提案だとは思わなかったようである。民間オーケストラの演奏会は、いくら芸術といっても、結局は芝居や映画と同類の興行だろう。おまけに、日本で西洋クラシック音楽がいよいよ人気を得はじめているといっても、まだ入口だ。現に山田耕筰を担いで鳴り物入りで始めた東京フィルハーモニー会管弦楽部の定期演奏会は、熱心な聴衆が詰めかけているとはいえ、普通にみれば不入りが続いているではないか。それなのに専用ホールを建て、数十人の交響楽団を長く養い続ける。もはや次期総帥の道楽ではすまない。ただちに趣味的散財をやめてもらうべきである。管弦楽部だけでなく、東京フィルハーモニー会全体が、副社長という脇役でいるうちの遊びとして認められるものだったが、これからはそうはゆかない。三菱の長老たちの考え方であったろう。財閥の内部でのドラマはいろいろあったようだ。小彌太の音楽趣味に理解を示す三菱の幹部社員は、海外勤務を命ぜられるなど、小彌太のそばから居なくさせられもした。耕筰の女性問題のゴシップもうまく絡められた。

1916（大正5）年2月、東京フィルハーモニー会はまったく唐突に解散した。管弦楽部も定期演奏会を6回までやったところで消滅した。山田耕筰は失意のどん底に沈んだ。小彌太の三菱合資会社社長就任は同年7月である。ひとりの富豪の夢の道楽は終わった。

文｜片山杜秀（かたやま もりひで）

思想史研究者、音楽評論家。慶應義塾大学法学部教授。2008年、『音盤考現学』『音盤博物誌』で吉田秀和賞、サントリー学芸賞を受賞。『クラシックの核心』『ゴジラと日の丸』『近代日本の右翼思想』『未完のファシズム』『見果てぬ日本』ほか著書多数。

次回予告　次回は山田耕筰と並ぶ日本楽壇のもうひとりの“父”、近衛秀麿（このえ ひでまろ）が登場。日本のオーケストラ運動はどこへ向かうのでしょうか。

Overview

4月定期公演

名匠スラットキンが4年ぶりに登場
アメリカ音楽が散りばめられた3つのプログラム

4月定期公演では名匠レナード・スラットキンが3つのプログラムを指揮する。

Aプロには20世紀から21世紀にかけて書かれた作品が並ぶ。細川俊夫の《冥想〜3月11日の津波の犠牲者に捧げる〜》と、第2次世界大戦中に作曲されたヴォーン・ウィリアムズの《交響曲第5番》の組み合わせは、祈りや救済といったキーワードを想起させる。ジャズのイディオムが散りばめられたジョン・アダムズの《サクソフォーン協奏曲》では、名手ブランフォード・マルサリスの縦横無尽な活躍に期待したい。

Bプロは古今の交響曲が対比される。ハイドンの《交響曲第70番》は対位法を駆使したドラマチックな作品。スラットキン夫人でもあるアメリカの作曲家マクティの《交響曲第1番〜管弦楽のためのバレエ〜》は、バレエと題されるだけあってリズミカルで躍動感にあふれる。メンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲》では、動画サイトでも人気を呼ぶ新世代のスター、レイ・チェンのソロに期待が膨らむ。

Cプロはオール・コープランド・プログラム。《バレエ音楽「ロデオ」から4つのダンス・エピソード》《バレエ音楽「アパラチアの春」》など代表作が集められた。《リンカーンの肖像》では俳優、歌手の石丸幹二が語りを務める。

［飯尾洋一／音楽ジャーナリスト］

A

4/11 土 6:00pm
4/12 日 3:00pm
NHKホール

細川俊夫／冥想〜3月11日の津波の犠牲者に捧げる〜（2012）
ジョン・アダムズ／サクソフォーン協奏曲（2013）
ヴォーン・ウィリアムズ／交響曲 第5番 ニ長調

指揮：レナード・スラットキン
サクソフォーン：ブランフォード・マルサリス

B

4/22 水 7:00pm
4/23 木 7:00pm
サントリーホール

ハイドン／交響曲 第70番 ニ長調 Hob. I–70
メンデルスゾーン／ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64
マクティ／交響曲 第1番〜管弦楽のためのバレエ〜（2002）

指揮：レナード・スラットキン
ヴァイオリン：レイ・チェン

C

4/17 金 7:00pm
4/18 土 3:00pm
NHKホール

コープランド生誕120年・没後30年
コープランド／バレエ音楽「ロデオ」から4つのダンス・エピソード
コープランド／静かな町
コープランド／リンカーンの肖像＊
コープランド／バレエ音楽「アパラチアの春」

指揮：レナード・スラットキン
語り：石丸幹二＊

ケント・ナガノ&N響が贈る

ヴィトマン《オラトリオ「箱舟」》その魅力に迫る VOL. 02 先行き不透明な時代に放つメッセージ

日本初演

Widmann "Arche," oratorio

2020年7月にケント・ナガノとN響が取り上げるヴィトマン《オラトリオ「箱舟」》。

N響との初共演でこの大作に挑む意気込みを2019年11月、来日中のマエストロに訊ねた。

ケント・ナガノ｜1951年カリフォルニア生まれ。リヨン国立歌劇場、ハレ管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、バイエルン国立歌劇場の要職を歴任。現在は、モントリオール交響楽団音楽監督、ハンブルク国立歌劇場および同フィルハーモニー管弦楽団の音楽総監督を務めている。N響とは来る6月定期公演で初共演予定。（2019年11月都内、撮影：平舘平）

初共演となるN響との音楽作り

いつまでも若々しい印象が漂う日系米国人指揮者、ケント・ナガノも今年で69歳。欧米両大陸でオペラとシンフォニー・コンサート、古楽から新作まで幅広い領域で自由自在に活躍する21世紀の巨匠（マエストロ）が、2020年、NHK交響楽団と初めて共演する。国際選抜チームのサイトウ・キネン・オーケストラ（1997年）を除けば、固定メンバーの日本のプロ・オーケストラを指揮すること自体が、1986年のサントリーホール開場記念公演で新日本フィルハーモニー交響楽団を振って以来、34年ぶりとなる。

「意図的に避けていたわけではありませんよ（笑）。すべてを同時にこなすことができなかっただけです。私自身、長期のパートナーシップを好むタイプの人間なので、現在だとドイツのハンブルク国立

歌劇場、カナダのモントリオール交響楽団の2大拠点に集中している結果、他のオーケストラと知り合う機会を逃し続けてきたといえます。そうした歩みのなかでN響と出会い、私のルーツである日本のオーケストラとの仕事が遂に始まります」。

「今回、N響とのご縁を授かったことを心から嬉(うれ)しく思います。オーケストラには、それぞれのコミュニティの文化状況を映す側面があると同時に、それ自体が個々に優れた才能を持つ音楽家による、自由な社会でもあります。指揮者は彼らと一体になり、ひとりでは達成できない高いレベルの音楽的メッセージをつくり上げ、より大きな外の社会に向けて発信していくのです。若い世代が多いと聞くN響のメンバーとも知識や経験を交換しながら、ポジティブな響きを創造できればと思っています」。

未来志向の音楽

ケントは、来る2020年6月27日と28日のN響定期公演(Aプログラム・NHKホール)の演目にグスタフ・マーラーの《交響曲第9番》を選んだ。さらに7月4日の特別公演(サントリーホール)では、ケントが2017年にハンブルクで世界初演したイェルク・ヴィトマンの《オラトリオ「箱舟」》の日本初演に臨む。ケントによると、今回取り上げるマーラーとヴィトマンの作品には共通点があると言う。

「マーラーは1908年にニューヨーク・フィルハーモニックを初めて指揮して成功をおさめる一方、ウィーン宮廷歌劇場(現在のウィーン国立歌劇場)とはトラブル続きだったので、活動の中心を旧大陸から新大陸、オペラからコンサートへと移そうと考えました。マーラーはさまざまなプレッシャーを抱えながらも、調性の破壊に象徴される20世紀の音楽の不透明な未来を見据え『どうやって先へ進むか』を自問自答しながら、この《第9番》を書き上げたのです」。

「一方、ヴィトマンは港湾都市ハンブルクの新しい演奏会場、「エルプフィルハーモニー」の外観が船を思わせることから旧約聖書のノアの箱舟に想を得て、“現代のオラトリオ”といえる《箱舟》を完成しました」。

《箱舟》は教会のミサ式次第に忠実な前後2つの部分の中間に、極めて人間的な愛の世界を殺人まで交えて挿入する思い切った構成と、子どもたちが独唱に合唱に大活躍する仕立てが、画期的だ。

「キーワードは、神が人間に与えた罰を象徴する『洪水』です。ヴィトマンは地球温暖化、環境汚染など、現代社会の矛盾、構造上の課題を直視して、伝統的なミサの様式と現代の音楽語法を統合し、未来を担う子どもたちに多くを語らせ、終わり近くで『Dona nobis pacem(我らに平和を与えたまえ)!』と歌わせます。多くの耳慣れた素材の引用はマーラーの交響曲を思わせる手法で、ヴィトマン自身の現代的な感覚と絶えず対比させつつ、聴衆の耳を惹(ひ)きつけます。管弦楽の編成はとてつもなく巨大で、3つの合唱団を必要としますが、それらすべてが休止しピアノと独唱だけで語りかける場面の挿入も、同じくコントラスト(対比)の効果を発揮して、とにかく長大な作品を最後まで、一気に聴かせてしまうのです」。

「2つの作品の間には100年あまりの開きがありますが、『不透明な時代をどう生き抜くか?』のテーマで結びつき、一体のメッセージを放つはずです」。

《箱舟》日本初演に向けて

《箱舟》は、編成もテーマも大きな作品だが、「ゲンダイオンガク」の晦渋（かいじゅう）さとは無縁で、良質の大衆性を備えつつ、現代の感覚を究めるというバランス感覚が際立つ。

「《箱舟》はハンブルクの新しい演奏会場の開場記念にハンブルク・フィルがヴィトマンに委嘱、2017年1月13日に私が世界初演を指揮しました。彼に与えられた才能は、とてつもなく巨大だと感じます。すべての作品に共通する、深く、無尽蔵のエネルギーの根源が、ヴィトマン自身なのです」。

「ヴィトマン作品の構造や形式は、中世・ルネサンス以前の素朴な俗謡から教会音楽、バッハ一族、テレマン、ヘンデル、ブラームス、現代に至るまでの音楽のアイデアを踏まえ、彼自身のアイデアを展開していく汎ヨーロッパ的なものです。ブラームスはハンブルク出身の作曲家ですが、やはり過去から彼の同時代に至るすべての音楽様式を見据え、20世紀への架け橋となる作品を数多く残しました。ヴィトマンの近年の創作姿勢が、私には、ブラームスのパイオニア精神と二重写し（パラレル）に見えます」。

「そのように才能あふれる作曲家の巨大な劇場的作品（シアターピース）を、N響とともに日本初演という形で、ヨーロッパ圏外では初めての演奏を実現できるのは、素晴らしいことです。マーラーとヴィトマン、2曲そろってN響の演奏で聴かれることを、強くお勧めします」。

［取材・構成：池田卓夫／音楽ジャーナリスト］

次回予告	4月号では、《箱舟》の細部を分析、この大作を紐解（ひも）いてゆきます

［特別企画］
イェルク・ヴィトマン《箱舟》を語る

作曲家が自ら、この記念碑的な大作について聴きどころを語ります
［日時］2020年3月10日（火）3:00pm
［出演］イェルク・ヴィトマン／白石美雪［聞き手］
［会場・詳細］ゲーテ・インスティトゥート東京（青山一丁目駅より徒歩7分）
ホームページ https://www.goethe.de/tokyo

2020年7月4日㊏ 5:00pm | サントリーホール

ヴィトマン／オラトリオ「箱舟」（2016）［日本初演］

2020 July 4 (Sat) 5:00pm, Suntory Hall
Widmann "Arche," oratorio (2016)
[Japan Première]

指揮：ケント・ナガノ	Kent Nagano, conductor
ソプラノ：マルリス・ペーターゼン	Marlis Petersen, soprano
バリトン：トーマス・E. バウアー	Thomas E. Bauer, baritone
合唱：新国立劇場合唱団、アウディ・ユーゲント合唱団	New National Theatre Chorus,
語り（子役）：斎藤來奏、三宅希空	Audi Jugendchorakademie, chorus
児童合唱：NHK東京児童合唱団	Rukana Saito, Noa Miyake, narrator
	NHK Tokyo Children Chorus, children's chorus

チケット料金	一般：S席15,000円 A席12,000円 B席10,000円 C席8,000円 D席6,000円 ユースチケット（25歳以下）：S席6,000円 A席5,000円 B席4,000円 C席3,000円 D席2,000円

チケット発売日	発売開始：3月1日［日］10:00am N響定期会員先行発売：2月26日［水］10:00am

PROGRAM

A

Concert No.1935 NHK Hall

February

15(Sat) 6:00pm

16(Sun) 3:00pm

conductor | Paavo Järvi

horn | Stefan Dohr

concertmaster | Fuminori Maro Shinozaki

Hans Abrahamsen
Horn Concerto (2019)

[NHK Symphony Orchestra, Berliner Philharmoniker, the Zaterdag Matinee, Seattle Symphony Orchestra and Auckland Philharmonia Orchestra co-commissioned/ Japan Première] [18′]

Ⅰ Sehr langsam und mit viel Ruhe
Ⅱ Stürmisch und unruhig
Ⅲ Sehr langsam, ohne Zeit

— intermisson (20 minutes) —

Anton Bruckner
Symphony No. 7 E Major [64′]

Ⅰ Allegro moderato
Ⅱ Adagio: Sehr feierlich und sehr langsam
Ⅲ Scherzo: Sehr schnell
–Trio: Etwas langsamer
Ⅳ Finale: Bewegt, doch nicht schnell

Artist Profiles

Paavo Järvi, conductor

© Kaupo Kikkas

Paavo Järvi celebrates his fifth season as Chief Conductor of the NHK Symphony Orchestra with a high profile European tour in 2020 including concerts in London, Paris, Vienna, Amsterdam, Berlin and Brussels. 2019 also celebrates the start of his tenure as Music Director and Chief Conductor of the Tonhalle-Orchester Zürich and his 15th season as Artistic Director of the Deustche Kammerphilharmonie Bremen. In addition to his roles as Conductor Laureate of the Frankfurt Radio Symphony and Music Director Laureate of the Cincinnati Symphony Orchestra, Järvi is much in demand as a guest conductor with the Berliner Philharmoniker, Münchner Philharmoniker, London's Philharmonia, Staatskapelle Berlin and Staatskapelle Dresden. Other guest engagements include the Royal Concertgebouw Orchestra, Wiener Philharmoniker, New York Philharmonic

and Teatro alla Scala in Milan.

Paavo Järvi is a dedicated supporter of Estonian composers and Artistic Advisor to the Estonian National Symphony Orchestra. Each summer he returns to Estonia to lead the Järvi Conducting Academy and Pärnu Music Festival where he also created the internationally acclaimed Estonian Festival Orchestra. He was awarded the Order of the White Star by the President of Estonia in 2013 for his outstanding contribution to Estonian culture.

With an extensive discography, Paavo Järvi has won a Grammy Award and was named Artist of the Year by both Gramophone and Diapason magazines. He was appointed Commandeur de L'Ordre des Arts et des Lettres by the French Ministry of Culture and awarded the Sibelius Medal for his work in bringing greater attention to the Finnish composer's music during his tenure with the Orchestre de Paris.

Born in Tallinn, Estonia, Paavo Järvi studied percussion and conducting at the Tallinn School of Music. In 1980, he moved to the USA where he continued his studies at the Curtis Institute of Music and at the Los Angeles Philharmonic Institute with Leonard Bernstein.

Stefan Dohr, horn

© Simon Pauly

Stefan Dohr, who has a perfect technique and rich tones, is a leading figure among the world's horn players. He was born in Germany in 1965 and studied in Essen and Cologne. He became Principal Horn of the Oper Frankfurt when he was 19 years old. After serving as Principal Horn with the Orchester der Bayreuther Festspiele, the Nice Philharmonic Orchestra and the Deutsches Symphonie-Orchester Berlin, he has been Principal Horn of the Berliner Philharmoniker since 1993.

Beside his orchestral career, he has also worked as a soloist with conductors such as Daniel Barenboim, Bernard Haitink as well as Claudio Abbado, who invited him to the Lucerne Festival Orchestra as its Principal Horn. As a chamber musician, he not only performs in an ensemble with the members of the Berliner Philharmoniker, but also works with famed artists such as Maurizio Pollini, Lars Vogt and Ian Bostridge as well as playing as a member of the Ensemble Wien-Berlin, the world's leading woodwind quintet.

This is his first collaboration with the NHK Symphony Orchestra after an absence of seven years since 2013. As he has ample achievements with modern music having given the world premiere performances to the works written for him by composers such as Herbert Willi (in 2008), Toshio Hosokawa (in 2011) and Wolfgang Rihm (in 2014), expectations are high for his Japan premiere of the work by Hans Abrahamsen he will perform on this occasion.

[Stefan Dohr by Katsuhiko Shibata, music critic]

Hans Abrahamsen (1952–)

Horn Concerto (2019)

[NHK Symphony Orchestra, Berliner Philharmoniker, the Zaterdag Matinee, Seattle Symphony Orchestra and Auckland Philharmonia Orchestra co-commissioned/ Japan Première]

The Danish composer Abrahamsen was born in 1952, studying composition at the Royal Danish Academy of Music in Copenhagen. In his youth he wrote some experimental music that requires unorthodox performance venues. At one time, he was politically motivated, reflecting his views into his works. In the 1970s, he led the "New Simplicity" movement to stay away from the complex music favored by European contemporary composers of the mid twentieth century. At the same time, however, he incorporated elements of serial as well as Romantic music. Abrahamsen's new Horn Concerto consists of three movements, of which the first begins slowly and quietly. Here the solo horn mostly plays a series of sustained notes. The fast second movement is written in a contrasting manner. Unhurried and peaceful moods return in the finale; it ends with trumpet notes marked quadruple pianissimo.

Anton Bruckner (1824–1896)

Symphony No. 7 E Major

Bruckner began composing Symphony No. 7 in E Major in September, 1881, completing it approximately two years later. It premiered on December 30, 1884, with Arthur Nikisch conducting the Leipzig *Gewandhausorchester*. This first performance was an enormous success, firmly establishing Bruckner's status as a composer of symphonies, the recognition he had long coveted. In his Seventh Symphony, Wagner, whom Bruckner regarded highly, plays an important role. This is particularly apparent in the Adagio second movement. Its main theme, a sorrow and mournful melody, came to Bruckner when he had a premonition of Wagner's death. Reflecting this, the movement opens with a quartet of Wagner tubas, a rarely utilized brass instrument that is strongly associated with, as its name suggests, the German legendary composer. The Wagner tubas, together with a regular tuba, also begin the concluding segment of the slow movement, a coda Bruckner added when he learned about Wagner's death. Incidentally, the movement was also performed at Bruckner's own funeral.

The Seventh Symphony has three other movements. The first begins with a theme that Bruckner heard in a dream. It was not, however, an entirely new one, since it cites a motif from his previous work, Mass in D Minor composed in 1864. The third movement is a scherzo marked "*Sehr schnell* (Very fast)." At the beginning of its middle section (Trio), the tempo slows down, and the tonal atmosphere lightens up until the fast main scherzo returns. A variant of the opening theme of the first movement appears near the end of the finale, leading to the exultant conclusion that ends with trumpets playing a prolonged E-major arpeggiated chord.

Akira Ishii

Professor of Keio University. Visiting Scholar at the Free University Berlin between 2007 and 2009. Holds a Ph.D. in Musicology from Duke University (USA).

PROGRAM

B

Concert No.1934 Suntory Hall

February

5(Wed) 7:00pm

6(Thu) 7:00pm

conductor | Paavo Järvi | for a profile of Paavo Järvi, see p.45

violin | Leticia Moreno

concertmaster | Fuminori Maro Shinozaki

Sergei Prokofiev
Violin Concerto No. 1 D Major Op. 19 [23′]

Ⅰ Andantino
Ⅱ Scherzo: Vívacissimo
Ⅲ Moderato

— **intermisson** (20 minutes) —

Sergei Rakhmaninov
Symphony No. 2 E Minor Op. 27 [60′]

Ⅰ Largo–Allegro moderato
Ⅱ Allegro molto–Moderato–meno mosso
Ⅲ Adagio
Ⅳ Allegro vivace

Artist Profile

Leticia Moreno, violin

© Onur Ayvadi

Spanish violinist Leticia Moreno studied under Zakhar Bron both at the Reina Sofía School of Music in Madrid and at the Cologne University of Music, and under Maxim Vengerov at the University of Music Saar. She has won numerous international competitions, and after becoming the winner of the 2012 ECHO Rising Stars Award, a prestigious prize in Germany, she started to perform across Europe. Until now she has worked under the batons of the world's celebrated conductors including Zubin Mehta, Esa-Pekka Salonen, Paavo Järvi, Vladimir Ashkenazy, Christoph Eschenbach and Peter Eötvös with famed orchestras such as the Wiener Symphoniker, the St. Petersburg Philharmonic Orchestra, the Mahler Chamber Orchestra, the National Symphony Orchestra, the Mariinsky Theatre Orchestra, the Fiorentino Maggio Musicale Orchestra and the Monte-Carlo Philharmonic Orchestra. She has been invited to major Spanish orchestras on a regular basis.

In the 2018/19 season, she made her debut with the Philharmonia Orchestra in London, and the NCPA Orchestra in Beijing. She plays a Nicolò Gagliano dating from 1762.

[Leticia Moreno by Takuya Katagiri, music critic]

Program Notes | Akira Ishii

Sergei Prokofiev (1891–1953)

Violin Concerto No. 1 D Major Op. 19

Prokofiev began composing his Violin Concerto No. 1 in D Major, Op. 19 in 1915. He had retreated to a village in the Caucasus to evade World War I. There he met a girl and fell passionately in love with her. The sketch of the opening theme was written around this time. In the following two years, Prokofiev occupied himself with composing substantial theatrical pieces and was unable to return to the concerto until 1917. The First Violin Concerto has three movements. It opens calmly with a long violin theme that has a dream-like tone quality. The second movement is a scherzo that comprises numerous technically demanding passages for the soloist. The finale is in a modest tempo and ends quietly with a series of violin notes in the utmost high register.

Sergei Rakhmaninov (1873–1943)

Symphony No. 2 E Minor Op. 27

Sergei Rakhmaninov's Symphony No. 2 in E Minor, Op. 27 remains one of his most popular compositions along with his Piano Concerto No. 2 in C Minor, Op. 18. Rakhmaninov composed several important pieces while still a student at the Moscow Conservatory. Upon graduating, he began to publish works at a constant pace — he enjoyed at the same time an active performing career as a concert pianist. In the mid-1890's, however, Rakhmaninov nearly stopped composing after he learned about Tchaikovsky's passing away. He was devastated by the death of the musician for whom he had the deepest admiration. This was his state of mind in which he wrote his first symphony (Symphony No. 1 in D Minor, Op. 13), only to receive unfavorable reviews at its premiere. This lead to frequent bouts of mental depression, eventually forcing him to leave Russia for Dresden. During this period Rakhmaninov composed his Second Symphony, completing it in 1907 or 1908.

Rakhmaninov's Second Symphony comprises four movements, of which the first is relatively long. It begins with a slow introduction filled with expressive and sorrowful themes, followed by the allegro moderato main section that consists of numerous melancholic melodies. The second movement is a scherzo that alludes to the medieval *Dies irae* chant. Much of the slow third movement is made up of sublime melodic figures, leading to the magnificent finale. The whole symphony is concluded with Rakhmaninov's characteristic four-note ending motif.

Akira Ishii | For a profile of Akira Ishii, see p.47

PROGRAM

C

Concert No.1933 **NHK Hall**

January 31(Fri) 7:00pm
February 1(Sat) 3:00pm

conductor | Rafael Payare

cello | Alisa Weilerstein

concertmaster | Rainer Küchl

Dmitry Shostakovich / Levon Atovmyan
Ballet Suite No. 1 [14′]

Ⅰ Lyric Waltz
Ⅱ Dance
Ⅲ Romance
Ⅳ Polka
Ⅴ Waltz-Humoresque
Ⅵ Galop

Dmitry Shostakovich
Cello Concerto No. 2 G Major Op. 126 [33′]

Ⅰ Largo
Ⅱ Allegretto
Ⅲ Allegretto

— **intermisson** (20 minutes) —

Dmitry Shostakovich
Symphony No. 5 D Minor Op. 47 [45′]

Ⅰ Moderato
Ⅱ Allegretto
Ⅲ Largo
Ⅳ Allegro non troppo

Artist Profiles

Rafael Payare, conductor

The Venezuelan music program *El Sistema* has been reputed to have fostered numerous world-renowned musicians, and Gustavo Dudamel, a conductor popular worldwide, including in Japan, is a symbolic such figure. Rafael Payare born in 1980 is also a young talent from *El Sistema*. While conducting orchestras in his native country including the Orquesta de la Juventud Venezolana Simón Bolívar, he participated in orchestral tours and recordings of renowned conductors such as Claudio Abbado and Simon Rattle. He served in the positions of Chief Conductor and Music Director of the Ulster Orchestra in Northern Ireland from 2014 to 2019, was invited to the BBC Proms in the summers of

2016 and 2019, and assumed the position of Music Director of the San Diego Symphony in the 2019/20 season. He has steadily expanded the sphere of his activities on the European and American stages by conducting the Wiener Philharmoniker and the Chicago Symphony Orchestra, and working with celebrated soloists such as Gil Shaham, Jean-Yves Thibaudet and Piotr Anderszewski. He has collaborated with the NHK Symphony Orchestra in its summer concert and local concerts, but this is the first time to conduct its subscription concert.

Alisa Weilerstein, cello

© Decca / Paul Stuart

Alisa Weilerstein was born in 1982 to Donald Weilerstein, the first violin of the Cleveland Quartet as her father, and Vivian Hornik Weilerstein, the pianist as her mother. She started to learn the cello at the age of 4, and when she was 13 she worked with the Cleveland Orchestra playing Tchaikovsky's *Variations on a rococo theme*. She studied under Richard Weiss at the Cleveland Institute of Music, and graduated from Columbia University with a degree in Russian History.

In 2010, she worked with Daniel Barenboim and the Berliner Philharmoniker to play Elgar's Cello Concerto, and with Barenboim and the Staatskapelle Berlin, she recorded concertos of both Elgar and Elliott Carter in 2012. In 2015, she made a recording of Shostakovich's 1st and 2nd Cello Concertos with the Symphonieorchester des Bayerischen Rundfunks under Pablo Heras-Casado. She is also a keen advocate of contemporary music, and has given the world premiere performances to cello concertos dedicated to her by the composers such as Pascal Dusapin and Matthias Pintscher. She first worked with the NHK Symphony Orchestra in February 2015, playing Elgar's Cello Concerto under Paavo Järvi, giving an eloquent performance of grand scale.

[Rafael Payare by Seiko Ito, music critic, Alisa Weilerstein by Haruo Yamada, music critic]

Program Notes | Akira Ishii

Dmitry Shostakovich (1906–1975) / Levon Atovmyan (1901–1973)

Ballet Suite No. 1

Dmitry Shostakovich's Ballet Suite No. 1 was assembled and arranged by composer Levon Atovmyan, who, in corporation with Shostakovich, created between 1949 and 1953 several orchestral suites using Shostakovich's compositions (mostly his ballet and film music). The Ballet Suite No. 1 comprises six pieces, whose main melodies are found in Shostakovich's third ballet *The Limpid Stream*, Op. 39, premiered in Leningrad (today's St. Petersburg) in 1935. It is a comical work in three acts about ballet dancers who have been sent to a new Soviet collective farm to provide entertainment. Besides the Ballet Suite No. 1, Atovmyan formed three other orchestral suites using pieces from the ballet. The Ballet Suite No. 1 is scored for two flutes (the second doubling piccolo), oboe, two clarinets, bassoon, three French horns, two trumpets, two

trombones, tuba, timpani, triangle, tambourine, snare drum, cymbals, xylophone, glockenspiel, vibraphone, piano (doubling celesta), and strings.

The first composition in the First Ballet Suite, titled *Lyric Waltz*, is mostly based on the opening piece of Shostakovich's Suite for Jazz Orchestra No. 1, composed in 1934. It is a short waltz that begins with a Russian folk-song like theme. The title of the second piece is *Dance*. It is a version of the forty-first piece of *The Limpid Stream*, consisting of merry tunes played by wind instruments accompanied by plucked string notes (pizzicatos). The third composition, *Romance*, is the fourth piece of the ballet. An exuberant dance titled *Polka* follows. It is based on the twenty-eighth piece of the ballet. The fifth composition is *Waltz-Humoresque*, which is taken from Shostakovich's second ballet *The Bolt*, Op. 27, premiered in 1931. It is a delightful composition that starts with a theme played by violins and piccolo. The concluding work *Galop* is a boisterous dance, a perfect fit to conclude a joyous composition. Overall, the music is not at all complex and may not be easily identified as a work by Shostakovich. It is still an important composition because it reveals, however rare that is, his lighter side.

Dmitry Shostakovich (1906–1975)

Cello Concerto No. 2 G Major Op. 126

C

31. JAN. & 1. FEB. 2020

Shostakovich's Cello Concerto No. 2, Op. 126 is one of Shostakovich's later works completed in the spring of 1966. Like his other cello concerto (Cello Concerto No. 1, Op. 107, written 1959), the piece was written for his friend Mstislav Rostropovich (1927–2007), one of the best-known cellists of the twentieth century. The Second Cello Concerto premiered in Moscow at a concert commemorating Shostakovich's sixtieth birthday on September 25, 1966, with Evgeny Svetlanov conducting the USSR Symphony Orchestra and Rostropovich performing the solo cello part. The composition is scored for solo cello, piccolo, flute, two oboes, two clarinets, three bassoons (the third doubling contrabassoon), two French horns, timpani, whip, woodblock, tom-tom, tambourine, snare drum, bass drum, xylophone, two harps in unison, and strings.

Shostakovich became acquainted with Rostropovich in 1943 — the cellist enrolled himself at Shostakovich's orchestration class at the Moscow Conservatory (Shostakovich had moved to Moscow from Leningrad in the spring of that year). The composer recognized right away his student's talent, but it would be a while before he wrote music for the cellist. In the meantime, Rostropovich became known as a virtuosic performer. He won prizes at competitions in Moscow in 1945, Budapest in1949, and Prague in 1950. He also received the highly esteemed award Stalin Prize in 1951. He then had numerous opportunities to perform Shostakovich's Cello Sonata of 1934 with the composer accompanying him. Finally in 1959, Shostakovich wrote a cello concerto for Rostropovich. The piece — the First Cello Concerto — was enthusiastically received, leading the composer to write another piece for the cellist the following year.

Shostakovich's Cello Concerto No. 2 comprises three movements. The unhurried first movement, which was originally conceived as an opening movement of a symphony, begins with the solo cello alone stating a theme that lasts seven measures. The bass sections of the orchestra (cellos and double basses) follow and quietly accompany the solo cello. This initiating section establishes the dark and somber sonority that dominates much of the movement. The eerie atmosphere is further emphasized in the cadenza near the end, in which the bass

drum aids the solo cello. The second movement is a scherzo-like movement (in duple meter) comprising numerous bizarre but often comical motifs. The main tune here is based on an Odessa street song *Bubliki, kupitye, bubliki* (*Buy My Bread Rolls*). The finale begins with a prolonged cadenza-like section for two French horns accompanied by snare drum. The solo cello follows and imitates the horn fanfare.

Dmitry Shostakovich (1906–1975)

Symphony No. 5 D Minor Op. 47

Shostakovich's Symphony No. 5 in D Minor, Op. 47 was composed during the composer's tumultuous period in which he was bracing an ordeal created by Joseph Stalin and his toadying adherents. Shostakovich began writing the Fifth Symphony on April 18, 1937, finishing it later in the same year. It premiered on November 21, 1937, with Evgeny Mravinsky conducting the Leningrad Philharmonic Orchestra. It is scored for piccolo, two flutes, two oboes, E-flat clarinet, two clarinets, two bassoons, contrabassoon, four French horns, three trumpets, three trombones, tuba, timpani, snare drum, triangle, cymbals, bass drum, tam-tam, bells, xylophone, two harps, piano (doubling celesta), and strings.

Between 1930 and 1932 Shostakovich worked on what would become his second full-production opera *Lady Macbeth of the Mtsensk District*, Op. 29, a theatrical work based on the novel of the same name by Nikolai Leskov. The opera was first performed on January 22, 1934 in Leningrad and two days later in Moscow. It was well received and was staged right away at numerous opera houses in many different countries. Its popularity, however, suddenly diminished when Stalin, who saw it for the first time in January 1936, found it disgusting. Two days after the autocrat attended the performance, an anonymous article about *Lady Macbeth of the Mtsensk District* — it is generally believed that Stalin was the author — was published in *Pravda*, the official newspaper of the Soviet Communist Party. It strongly condemned the piece; as a result, it was withdrawn from the theaters and was not staged again for more than twenty years. In February of the same year, *Pravda* again denounced Shostakovich's music; this time the target was his ballet *The Limpid Stream*. These events led the composer's career to decline sharply. His Symphony No. 4 in C Minor, Op. 43, for instance, did not receive its premiere until twenty-five years after it was composed. His Symphony No. 5, however, turned Shostakovich's doomed fate around. The first performance went tremendously well, instantly vindicating his honor. This happens to coincide with the literal subject of the symphony, "rebirth." Much of the Fifth Symphony is filled with quietly expressed mixed emotions, reflecting the composer's despaired circumstances. At the beginning of the finale, however, the music changes. According to the composer, "the tragically tense impulses of the earlier movements are resolved in optimism and the joy of living." The finale ends with a fully extended brightly sounding D major chord.

Akira Ishii | For a profile of Akira Ishii, see p.47

Aプロのメンデルスゾーン《交響曲第5番「宗教改革」》(11月30日)

公演報告

2019年12月定期公演

SUBSCRIPTION CONCERTS IN DECEMBER, 2019

12月定期公演では3人の気鋭が指揮台に登場。Aプロは鍵盤楽器奏者、作曲など多方面で活躍し、今回が指揮者としてN響デビューとなる鈴木優人、Bプロは古楽・モダンという枠組みを越えた活動で欧米の音楽界をリードするパブロ・エラス・カサド、Cプロでは「エル・システマ」出身のディエゴ・マテウスが指揮を務め、三者三様の意欲的なプログラムを繰り広げました。

Aプログラム メシアン／忘れられたささげもの、ブロッホ／ヘブライ狂詩曲「ソロモン」、コレッリ(鈴木優人編)／合奏協奏曲 第8番 ト短調「クリスマス協奏曲」、メンデルスゾーン／交響曲 第5番 ニ短調 作品107「宗教改革」(初稿／1830)(2019年11月30日、12月1日、NHKホール) **Bプログラム** リムスキー-コルサコフ／スペイン奇想曲 作品34、リスト／ピアノ協奏曲 第1番 変ホ長調、チャイコフスキー／交響曲 第1番 ト短調 作品13「冬の日の幻想」(2019年12月11、12日、サントリーホール) **Cプログラム** メンデルスゾーン／「夏の夜の夢」序曲 作品21、グラズノフ／ヴァイオリン協奏曲 イ短調 作品82、ベルリオーズ／幻想交響曲 作品14(2019年12月6、7日、NHKホール)

(左)Aプロの指揮を務めた鈴木優人。コレッリ《クリスマス協奏曲》ではチェンバロの弾き振りを披露した
(右)Aプロのブロッホ《ヘブライ狂詩曲「ソロモン」》でチェロ独奏を務めたニコラ・アルトシュテット
(いずれも11月30日)

（上）Ｂプロのチャイコフスキー《交響曲第1番「冬の日の幻想」》
（左）Ｂプロの指揮を執ったパブロ・エラス・カサド
（右）リスト《ピアノ協奏曲第1番》でソリストを務めたダニエル・ハリトーノフ
（いずれも12月11日）

（左）Ｃプロの指揮を執ったディエゴ・マテウス
（右）Ｃプロのグラズノフ《ヴァイオリン協奏曲》でソリストを務めたニキータ・ボリソグレブスキー
（下）没後150年のベルリオーズ・イヤーを締めくくったＣプロの《幻想交響曲》
（いずれも12月6日）

合唱は東京オペラシンガーズ、合唱指揮は熊倉優が務めた（12月21日、NHKホール）

公演報告

ベートーヴェン「第9」演奏会

2019年12月21、22、23、25日
NHKホール

N響第九 Special Concert

2019年12月26日
サントリーホール

Beethoven 9th Symphony Concert
NHKSO Beethoven 9th Special Concert

年末恒例の《第9》公演、今回はN響とは16年ぶりの共演となるオーストラリア出身のシモーネ・ヤングが指揮。豪華な歌手陣・合唱団と共に、きめ細やかかつ流麗にベートーヴェンを奏で、客席に大きな感動をもたらしました。

ベートーヴェン／交響曲 第9番 ニ短調 作品125「合唱つき」

指揮：シモーネ・ヤング
ソプラノ：マリア・ベングトソン　メゾ・ソプラノ：清水華澄
テノール：ニコライ・シュコフ　バス・バリトン：ルカ・ピサローニ
合唱：東京オペラシンガーズ　オルガン：勝山雅世（26日のみ）

指揮を執ったシモーネ・ヤング（12月21日）

左から、マリア・ベングトソン（ソプラノ）、清水華澄（メゾ・ソプラノ）、ニコライ・シュコフ（テノール）、ルカ・ピサローニ（バス・バリトン）（12月21日）

サントリーホールの公演では《第9》の前に勝山雅世（左）がヘンデル《音楽時計のための小品集》から〈ヴォランタリーまたは天使の飛行〉〈ジーグ ハ長調〉、アルビノーニ（勝山雅世編）《アダージョ》、バッハ《前奏曲とフーガ ト長調》をオルガン・ソロで披露した（12月26日）

26日にはサントリーホールに会場を移して《第9》が演奏された